

ヒトパピローマウイルス



ワクチンでできる、子宮頸がん予防

Q & A 編

プラーカ健康増進センターで、HPVワクチンが接種できます!! 3回の接種は、予約制です。

1983年に、ハラルト・ツア・ハウゼン博士によって、子宮頸がんの原因がHPV感染であることが発見されました。HPVは、大きさが50~55nm(ナノメートル)のDNAウイルスで、人の皮膚や粘膜に感染します。おもに粘膜に感染するタイプのうち、15種類ほどが、子宮頸がんの発がんに関係する発がん性HPVと呼ばれています。

最近話題の **HPV** ワクチンって
どんなものか教えてください。

子宮頸がんの原因になるHPVの感染を防ぐことによって、子宮頸がんを予防するワクチンです。日本でも2009年秋に承認され、発売されました。現在のワクチンは、すべての子宮頸がんを予防できるわけではなく、子宮頸がんの約70%をひきおこす

16型、18型の遺伝子をもつHPVの感染を予防します。

まだHPV感染経験のない11~14歳の女兒に接種するのが、最も

効果的ですが、45歳までの成人女性にも有効です。



教えて

北川 寛先生

日本人間ドック学会専門医
日本産科婦人科学会専門医



子宮頸がん検診とHPVワクチンについて、北川先生に、なんでも聞いてみましょう!!

Q1 まだ若い(20代)ので、子宮頸がん検診を受けなくても大丈夫でしょうか?

厚生労働省は子宮頸がん検診の開始年齢を20歳と定めています。子宮頸がんは比較的若い女性に多くみられ、特に20代~30代の女性に増えています。そして若い女性の妊娠や出産の可能性を奪うこともありますので、若いときからきちんと検診を受け、できればワクチン接種も受けて、子宮頸がんを予防して下さることが大切です。(グラフ1)

Q2 子宮がん検診の結果が「要精密検査」でした。子宮頸がんなのでしょうか?

「要精密検査」イコール「子宮頸がん」ではあ

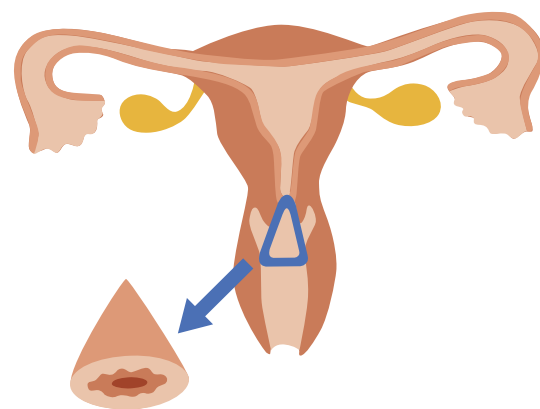
りません。細胞診で異常な細胞が見つかった場合、細胞の様子をさらに詳しく調べるために「コルポスコピー診」と「組織診」を行います。「組織診」で前がん状態(異形成)が見つかった場合そのごく一部ががんに進行します。

異形成はその程度により軽度異形成、中等度異形成、高度異形成に分けられます。軽度異形成はほとんどがんに進行することはないので、そのまま経過をみます。高度異形成は約20%が初期がんに進行するため、子宮の入り口を切除する円錐切除術を行います。

そこで、前がん状態や初期のがんの段階で発見されれば、円錐切除術ができ、妊娠も出産も可能です。(図1)

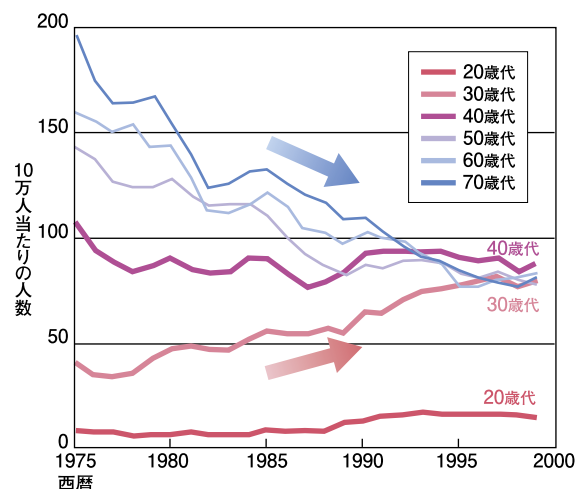
しかし、がんが進行していると、子宮を全摘出することになり、妊娠・出産ができなくなってしまいます。

【図1】子宮円錐切除手術



このように、子宮頸部を円錐形に切り取る手術です。

【グラフ1】年齢別子宮頸がんの罹患率



厚生省がん研究助成金「地域がん登録」研究班による「全国がん罹患率の推計値(1975-99年)」より

Q3 ウイルスに自然感染すれば、免疫が得られますか? また、一度のワクチン接種で、一生子宮頸がんにならないのですか?

HPVに自然感染するだけでは、十分な免疫は得られません。そのため感染の機会があれば何度でも感染してしまいます。また、ワクチンを接種してもすべての発がん性HPVの感染を防げるわけではありませんが、ワクチンを接種しなかった人に比べれば、かなり(70%くらい)は予防できます。

ワクチンの効果の持続期間については、現在7年くらいですが、抗体は20年くらい継続すると推計されています。

Q4 細胞診とHPV検査は同時に受けたほうがよいのでしょうか?

細胞診とHPV検査を同時に行えば、子宮頸がんだけでなく、がんになる前の状態(異形成)

を、早く発見できます。細胞診はがんの発見には有効な検査法ですが、技術的に限界があり、前がん状態では20~30%の見落としがあると言われてています。

このため、確実に前がん状態を発見するためには、細胞診とHPV検査を同時に受けるとベストですね。

Q5 HPVワクチンを接種すると副作用はありますか?

このワクチンは殻のみにセウウイルスを使用したワクチンなので、感染の心配はなく、安全なワクチンです。一般の予防注射と同様に、注射した部位が腫れたり痛むことがありますが、普通は1週間以内に消失します。

全身的な副反応として、疲労感、頭痛、吐き気、腹痛などが見られることがありますが、これらも自然に消失します。(図2)

このワクチンは半年の間に3回接種する必要がありますが、万一途中で妊娠がわかって、ワクチン接種による心配はありません。

【図2】ワクチン接種後のおもな症状

頻度10%以上	かゆみ、注射部分の痛み・赤み・腫れ・胃腸症状(吐き気、嘔吐、下痢、腹痛など)、筋肉の痛み、関節の痛み、頭痛、疲労
頻度1~10%未満	発疹、じんましん、注射部分のしこり、めまい、発熱、上気道感染
頻度0.1~1%未満	注射部分のピリピリ感・ムズムズ感
頻度不明	失神・血管迷走神経発作(息苦しい、息切れ、動悸、気を失うなど)



重い副反応として、まれに、アナフィラキシー様症状(血管浮腫・じんましん・呼吸困難など)があらわれることがあります。接種後1週間は症状に注意し、強い痛みがある場合や痛みが長く続いている場合などは、ご相談ください。

6 HPVワクチンで子宮頸がんや前がん病変を治すことはできないの？

このワクチンはすでに感染しているウイルスを排除したり、すでに発症しているがんを治すものではありません。あくまでも接種後のHPV感染を予防するものです。

子宮頸がんや前がん病変（高度異形成）の場合は手術が必要になります。

ですから、子宮頸がんにならないためには、検診を毎年受けて、早期に前がん病変で発見し、HPVワクチンを接種して、子宮頸がんを予防することが大切なのです。

7 性交渉により感染するHPVウイルスですが、リスクを負うのは女性のみ。男性の果たす役割はないのでしょうか？

HPVには多くの型がありますが、ローリスク

と呼ばれる6型、11型などは、男性・女性ともに性器に尖圭コンジローマという良性腫瘍を作ります。しかし、ハイリスクと呼ばれる16、18型のHPVは女性の場合は子宮頸がん、男性の場合は陰茎がんの原因になります。ちなみに、包茎の男性は陰茎がんになるリスクが高いと言われています。

外国の調査では男性の65%からウイルスが検出され、亀頭、陰茎、陰のうなどに多く見られました。また、同性愛者だけでなく一般の男性、女性にも、HPVによる肛門がんが増えていきます。

8 子宮頸がん検診を受けないと、HPV接種が受けられないのでしょうか？

検診を受けなくても、ワクチン接種は可能です。ワクチンを優先的に接種する11歳～14歳の女兒も子宮頸がん検診は必要ありません。

ただし、成人女性の場合はワクチン接種の有無にかかわらず、定期的子宮頸がん検診

を受ける必要がありますね。

9 子宮頸がん予防に大切なこのワクチンは、今後普及すると思いますか？ また普及努力はされていますか？

そのことは今後の課題なので、少し詳しく説明させていただきます。

HPVワクチンは、できれば性交渉を経験する前の10代前半に接種するのが望ましいのですが、そのためには、接種前にHPVを含めた性教育の必要もあります。その上、接種方法も接種率をあげるには、個別接種よりも、学校などでの集団接種が望まれます。

また、接種料金も、3回接種で5万円位かかり、個人で負担するには、高い料金ですので、公費負担での接種が望まれます。

海外では、オーストラリア、イギリス、カナダなど30カ国以上の国が12歳を中心に、公費負担や集団接種を行っています。（グラフ2）

日本では、現在約70の市町村で実施、また

は、実施を検討中で、栃木県大田原市や千葉県浦安市では、小学6年生や中学生の希望者に接種を予定しています。

新潟県でも、魚沼市が本年6月から、全国で初めて全額公費負担で、中学1年生を対象に接種を開始しました。その際に保護者や接種対象者への十分な説明が行われた結果、接種率も飛躍的に向上しました。

新潟県では、現在、南魚沼市、湯沢町など6市町村が全額助成を決め、一部自治体では、すでに接種が行われています。

また、厚労省も2011年度予算特別枠に、HPVワクチン助成事業として、150億円を盛り込み、子宮頸がんワクチンを積極的に推進しようとしています。

現在行われているHPVワクチンは二価抗体と呼ばれる16型、18型を予防するワクチンですが、4種類のウイルスを予防できる四価抗体のワクチンも開発されており、今後、より多くのウイルスを予防できるワクチンの開発が期待されます。

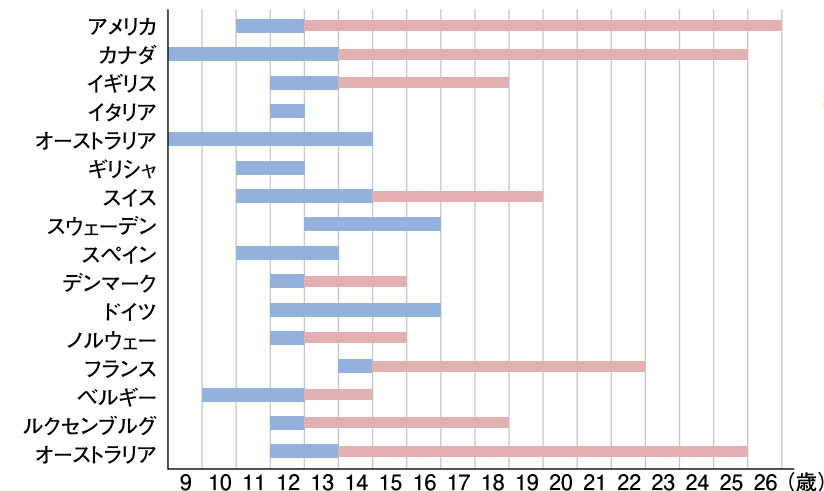
新潟県では、6市町村がHPVワクチンの全額助成を決定しました。

ワクチンの優先接種対象ですが、子宮頸がん検診の必要はありません。



ワクチン接種の有無にかかわらず、定期的に子宮頸がん検診を受けましょう。

【グラフ2】海外での子宮頸がん予防ワクチン接種年齢



優先接種対象
キャッチアップ接種対象
(優先接種対象ではないが、接種機会を逃した人に対する経過措置としての予防接種)